

「千里の道も一歩から」という言葉は、どんなに長い旅であっても、たった一つの行動や一歩から始まるという意味です。

この言葉は、私の日本での旅や経験をまさに表していると感じています。

来日前は、2週間という期間はとても長いと思っていました。しかし、アメリカに戻り、元の日常生活に戻った今、そう思っていた自分が間違っていたことに気づきました。日本で過ごした時間は、まるで一瞬の夢のようでしたが、とても鮮明に思い出すことができます。私は日本が本当に大好きで、今では「もう一つの故郷」だと感じるほどです。日本の文化や生活様式について多くのことを学び、その中には自分の生活に取り入れてみたいものもあります。日本での生活ほど完璧にはできないかもしれません、挑戦してみたいと思っています。

実際に日本で生活し、体験する中で、私はいくつかの発見をしました。その一つが、自動販売機です。飲み物が「温かい」 「冷たい」が、値段の表示の上を見れば分かるということを初めて知り、とても驚きました。アメリカの自動販売機では冷たい飲み物しか売っていないからです。私は自動販売機では水しか買いませんでしたが、周りの人に聞くだけで、どの飲み物が何なのか分かりました。

また、道路の側溝のふた（雨水ます）のデザインにも気づきました。SNSで、日本の側溝のふたにはユニークなデザインがあると見たことがあります、素敵だなと思っていました。すべてがデザインされているのかは分かりませんでしたが、日本で実際にいくつかの素敵なかつらを見ることができました。なぜアメリカには、こうした個性的なデザインがないのだろうと考えるようになりました。

日本での一番の思い出の一つは、ホストシスターのひなさんと、鹿屋高校のクラスメイトたちと放課後に過ごした時間です。

想像してみてください。鹿屋高校の3階にある1年4組の教室。授業が終わっているのに電気はついていて、机はきちんと並んだまま。教室の一角に集まった生徒たちが、まるで時間が止まったかのようにおしゃべりをしています。外では夕日が沈み、月が昇っていきます。その光景を、私は今でもはっきりと覚えています。

私たちは思いつくままに、いろいろな話をしました。日本語が十分に分からず、会話の半分くらいは理解できていなかったかもしれません、そこに一緒にいるだけで十分だと感じていました。長い授業が終わった後に友達と過ごす時間は、私にとって本当に必要なものでした。もしもう一度体験できるなら、迷わずそうしたいです。みんな元気にしていて、また必ず会いに行きたいと思っています。すぐには難しいかもしれません、できる限り努力します。

私が伝えたいのは、「自分を幸せにしてくれる人たちと過ごす時間を大切にすることが、何よりも大事だ」ということです。だから私は、人が大好きなのです。

最後に、「これからどうするの？」という問い合わせについてですが、正直なところ、まだはつきりとは分かりません。ただ、日本にまた戻ってくるつもりです。これは永遠の別れではなく、「またね」という一時的な別れです。できれば、鹿屋高校1年生のみんなが卒業する前に、もう一度会いに行きたいと思っています。卒業式に顔を出して、応援できたらとても素敵だと思います。私たちがそれぞれの夢を追いかけ始める前に、もう一度みんなに会いたいです。

日本語についても、少しずつ上達しています。「おはようございます」「いってらっしゃい」「おかえり」「おやすみ」などを覚えました。これはとても良いスタートだと思います。もっと日本語を勉強して、たくさんの人と日本語だけで会話ができるようになりたいです。

この夢を叶えてくれた MNCC の皆さん、そして関わってくださったすべての方々に、心から感謝しています。皆さんの支えがなければ、これは実現しませんでした。本当にありがとうございました。

日本で過ごした時間は、決して当たり前のものではなかったと、今改めて感じています。時間はとてもゆっくり進むようで、瞬きをする間に過ぎ去ってしまいます。だからこそ、目の前にある一瞬一瞬を大切にしなければなりません。すべては、あっという間に思い出になってしまふからです。

時間とは、まるで矢のようなものだと思います。一度放たれたら、二度と戻ることはできません。思い出も同じです。

「千里の道も一步から」。

この経験は、夢にも思わなかったほど素晴らしいものでした。